

三方一両損

ひょうじゅん
標準 ②

三方一両損

(落語・講談の話)

昔、江戸の町で、左官の金太郎が、三両の入ったさいふを拾いました。中の書き付けから、持ち主が大工の吉五郎だと分かったので、金太郎はさいふをとけに行きました。

ところが、吉五郎は言いました。「一度落とした金は、もうおれのものではない。おまえが持つて帰れ。」

金太郎も、「拾った金をもらうわけにはいかない。」とゆずりません。二人は、とうとう、けんかになってしまいました。

この争いは、町奉行の大岡越前守のもとへ持ちこまれました。大岡は、自分のさいふから一両を出して、四両にし、二人に二両ずつわたしました。そして、こう言いました。

「金太郎は、拾った三両を自分のものにすれば三両だったのに、二両になったので一両の損。吉五郎も、落とした三両がもれば三両だったのに、二両で一両の損。わたしも一両出したので一両の損。三人が一両ずつ損をする、三方一両損じゃ。」

二人は、大岡の見事なさばきに感心し、なかなかおもしろいということでした。

1 金太郎が拾ったさいふには、いくら入っていましたか。



両

2 金太郎と吉五郎が、けんかになったのはどうしてですか。

3 大岡は、自分のさいふからいくら出しましたか。



両

4 「三方一両損」とは、どういうことですか。

ア 三人が、一両ずつ損をすること
イ 三人が、一両ずつもうけること
ウ 一人だけが、三両損をすること